アレルギー性結膜疾患に対するベシル酸 ベポタスチン内服の有効性

合田 千穂·南場 研一·樋口 眞琴 大橋 勉·笹本 洋一·高橋 光生 岸本 里栄子·北市 伸義·大野 重昭

Efficacy of oral administration of Bepotastine besilate on allergic conjunctival disease

Chiho GODA, Kenichi NAMBA, Makoto HIGUCHI, Tsutomu OHASHI, Yoichi SASAMOTO, Mitsuo TAKAHASHI, Rieko KISHIMOTO, Nobuyoshi KITAICHI and Shigeaki OHNO

眼科臨床医報会

アレルギー性結膜疾患に対するベシル酸ベポタスチン内服の有効性

合 田 千 穂¹⁾ · 南 場 研 一¹⁾ · 樋 口 眞 琴^{1),2)} 大 橋 勉^{1),3)} · 笹 本 洋 一^{1),4)} · 高 橋 光 生^{1),5)} 岸本 里栄子^{1),6)} · 北 市 伸 義¹⁾ · 大 野 重 昭¹⁾

Efficacy of oral administration of Bepotastine besilate on allergic conjunctival disease

Chiho GODA¹⁾, Kenichi NAMBA¹⁾, Makoto HIGUCHI^{1),2)}, Tsutomu OHASHI^{1),3)}, Yoichi SASAMOTO^{1),4)}, Mitsuo TAKAHASHI^{1),5)}, Rieko KISHIMOTO^{1),6)}, Nobuyoshi KITAICHI¹⁾ and Shigeaki OHNO¹⁾

I 緒 言

アレルギー性結膜疾患は眼科日常診療における代表的な疾患で、日本眼科医会アレルギー眼疾患調査研究班によって全国28施設で行われた1993年1月1日から1995年12月31日の調査では、眼科外来を受診した患者の61.4%がアレルギー性結膜疾患に罹患していたと報告されている¹⁾。アレルギー性結膜疾患の主要な自覚症状には、掻痒感、充血、眼瞼腫脹、結膜腫脹、異物感などがあるが、とくに眼掻痒感はアレルギー性結膜疾患のいずれの疾患でも90%以上でみられ、不快感を伴う。

治療は現在、抗ヒスタミン薬を含めた抗アレルギー薬の点眼治療が主体であり、一剤で効果のないときに薬効の違う点眼薬を追加処方することがある。しかし、就学者や就労者、コンタクトレンズ装用者では決められた回数を点眼できないことがある。また、急性期には抗アレルギー薬の点眼だけでは自覚症状や他覚所見の改善がみられないことが多く、ステロイド薬の点眼が必要なこともある。しかし、ステロイド薬は易感染性、緑内障、白内障などの副作用があり、使用に際しては注意を要する。このように点眼のみの治療では、コンプライアンスの問題、眼局所での合併症の問題から治療に苦慮する症

例がみられる。

アレルギー性結膜炎にアレルギー性鼻炎を合併することは多く¹⁾、鼻炎に対して抗ヒスタミン内服薬が他科から処方されることがある。このようなアレルギー性鼻炎を併発しているアレルギー性結膜疾患患者において、抗ヒスタミン薬の内服を開始すると眼症状や所見が改善することを臨床上経験することがある。

今回, 抗アレルギー点眼薬で十分な臨床効果が得られなかった症例に対して, ベシル酸ベポタスチン (タリオン®) 内服による眼の自覚症状と他覚所見の変化について前回の中間報告²⁾に症例数を加え, 新たに検討したので報告する。

Ⅱ 対象および方法

対象は、北海道大学病院とその関連施設を受診したアレルギー性結膜疾患患者のうち、クロモグリク酸ナトリウムなどの抗ヒスタミン薬以外の抗アレルギー点眼薬を1週間以上投与して効果が現れなかった男性4例、女性16例、計20例である。

方法は、ベシル酸ベボタスチン錠1回1mgを1日2回内服させ、原則2週間以上臨床症状の推移を観察した。検討項目は、①自覚症状:掻痒感、異物感、流涙、眼痛、羞明、眼脂について、visual analogue scale (VAS)を用いた患者アンケートを実施した。②他覚所見:眼瞼結膜の充血、腫脹、濾胞、乳頭、眼球結膜の充血、浮腫、輪部のトランタス斑、腫脹、角膜上皮について観察し、判定は日本眼科アレルギー研究会小委員会のアレルギー性結膜疾患の重症度分類に基づいて高度(+++)、中等度(++)、軽度(+)、なし(-)の4段階に分類

¹⁾ 北海道大学大学院医学研究科眼科学分野 〒060-8638 札幌市北区 北15条西7丁目

²⁾ 大塚眼科病院

³⁾ 大橋眼科

⁴⁾ ささもと眼科クリニック

⁵⁾ 手稲渓仁会病院眼科

⁶⁾ 北海道医療大学病院眼科

Department of Ophthalmology and Visual Sciences, Hokkaido University Graduate School of Medicine

した。

Ⅲ 結 巣

1. 患者背景

対症症例のアレルギー性結膜疾患の内訳は全例アレルギー性結膜炎であった。年齢は30-78歳(平均61.3歳),アレルギー性結膜疾患の罹病期間は1か月~20年,平均2.4年であった。既往歴はアレルギー性鼻炎5例,アレルギー性鼻炎+喘息1例,なし11例,不明2例であった。

2. 自覚症状改善度

自覚症状 VAS スコアの推移を図1に示す。掻痒感は 投与2週後から有意な改善がみられ、投与4週後もその 効果が維持された(p<0.05: paired t 検定)。異物感、 眼脂も投与2週後から改善がみられたが有意差はなかっ た。流涙、眼痛、蓋明については、若干の改善がみられ た程度であった。

3. 他覚所見改善度

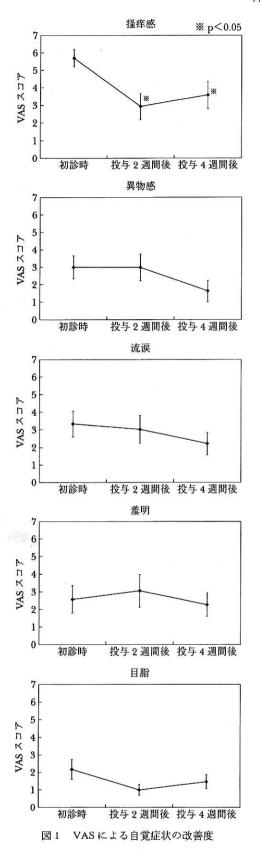
他覚所見スコアの変化を表1に示す。眼瞼結膜充血以外では眼所見がみられたのは半数ほどであったため,所見があった症例における改善率を示した。投与4週間後では,眼瞼結膜充血では61%,眼瞼結膜浮腫は66%,眼球結膜充血は64%で改善していた。眼瞼結膜濾胞,乳頭については23-30%の改善率にとどまった。また,トランタス斑や輪部腫脹,角膜上皮障害は開始時に所見がみられず,眼球結膜浮腫も開始時に所見がみられたのは1例(5%)のみであった。

4. 副作用

副作用は、眠気を含め全例でみられなかった。

Ⅳ 考 按

アレルギー性結膜疾患の主要な自覚症状はいらまでも なく掻痒感であるが、その成因は即時相における肥満細 胞からのヒスタミンを含めた化学伝達物質の遊離による とされている3)。ヒスタミンH1受容体拮抗薬は、アレ ルギー性結膜疾患の自覚症状の抑制に対して期待される ところが大きい。今回の結果でもヒスタミン H1 受容体 拮抗薬であるベシル酸ベポタスチンの内服で、掻痒感が 有意に改善した。現在、アレルギー性結膜疾患において 抗アレルギー点眼薬にて効果が不十分な場合には、ステ ロイド点眼薬を次に選択することが多い。しかし、ステ ロイド薬には易感染性、緑内障、白内障といった副作用 の可能性があることを考えると, 通年性アレルギー性結 膜炎や春季カタル、アトピー性角結膜炎といった慢性に 症状や所見が持続する疾患では、その使用が長期にわた るため、使用が難しい。また、抗アレルギー薬の点眼で 薬効が違うものを処方しても、点眼回数が増えるため、 就学者や就労者ではコンプライアンスを保てず、期待し た効果を得られないこともある。さらに平成18年から春 季カタルで0.1%シクロスポリン点眼液 (パピロックミ



-0.1%®)が使用できるようになり、今後有用性が期待されるが、現在は保険適応は春季カタルのみである。

アレルギー性結膜疾患患者のうち41.6%に鼻症状を併

表1 他覚所見スコアの変化

所 見	開始時 所見あり (%)	2 週間後			4 週間後		
		改善(%)	不変 (%)	悪化(%)	改善(%)	不変(%)	悪化(%)
眼瞼結膜充血	90	33	67	0	61	39	0
眼瞼結膜浮腫	45	22	78	0	66	34	0
濾胞	50	100	90	0	30	70	0
乳頭	65	0	92	5	23	77	0
眼球結膜充血	55	27	73	0	64	36	0
眼球結膜浮腫	5	0	100	0	0	100	0
トランタス斑	0	0	100	0	0	100	0
輪部腫脹	0	0	100	0	0	100	0
角膜上皮障害	0	0	100	0	0	100	0

発しているいことを考えると、副作用が少なく、かつ即効性の期待できる抗アレルギー内服薬の併用は価値があるものと思われる。今回は投与2週後の再来院時での症状の判定を行ったが、かゆみという不快な症状は一刻も早く効いて欲しいというのが患者の願いである。アレルギー性鼻炎や蕁麻疹の研究では、その効果を30分~1時

間で実感した患者が50%以上であったとの報告があり⁴⁾,眼科領域においても即効性が期待できることが推測される。

Ⅴ 結 論

アレルギー性結膜疾患において抗アレルギー点眼薬で 効果が得られない症例では、特に掻痒感において抗ヒス タミン薬内服は試みる価値のある治療法であると思われ た。

キーワード:アレルギー性結膜疾患,ベシル酸ベポタスチン, 経口抗ヒスタミン薬,眼掻痒感

対 対

- 1) 熊谷直樹: アレルギー性結膜疾患の疫学. 日本の眼科 69: 905-909, 1998.
- 2) 合田千穂, 大野重昭: かゆみの症例報告(3)アレルギー性結 膜疾患. アレルギー・免疫 12: 178—180, 2005.
- 3) 藤島 浩: 涙液中のサイトカイン,神経伝達物質. 高村悦子(編): NEW MOOK 眼科 6 アレルギー性眼疾患. 金原出版,東京,34—37,2003.
- 4) 伊東完治,赤萩勝一,清水勝利,小林健二:アレルギー性 鼻炎に対する抗アレルギー薬の臨床的検討.アレルギー・免 疫 10:88—97, 2003.